【 実践報告 】

人間福祉学会　活動報告

広島文教女子大学　人間福祉学会　事務局

Ⅰ. はじめに

平成 29 年 10 月 9 日（月・祝）広島文教女子大学人間福祉学会を開催しました。今年は、文教祭が同日にあり、多くの卒業生・在学生にお越しいただけるよう、この日での実施となりました。

今回は、「就職して 1、2 年目の卒業生に色々話してもらおう！」というテーマを設定しました。4 名の卒業生にお越しいただき、仕事内容、やりがい、葛藤、就職活動、大学生活について、就職して 1、2 年目の卒業生ならではの思いなどを語っていただきました。

Ⅱ. 内容概要

第一部　卒業生による実践報告

14 期生　時乗　萌菜さん
障害福祉分野（社会福祉法人みどりの町
大和学園勤務　職種：生活支援員）

【自己紹介、仕事の紹介】

大学 3 年次に今の施設に相談援助実習に行きました。それをきっかけに就職先として考え、現在に至ります。

私が働いているところは障害者支援施設です。中度から重度の障害のある人が利用しています。その中で、私は生活支援員として、24 時間切れ目のない支援をさせていただいています。毎日どなたの支援を担当するか、細かく分けています。支援内容は、掃除、髭剃りや身だしなみの介助、入浴介助、食事の準備や介助、服薬管理など様々です。余暇活動の企画では、映画や買い物に出かけたり、女子会に行ったりして、楽しく過ごしていただけるよう工夫しています。支援内容には、金銭管理もあります。おやつ、衣類、生活用品を、その人の好みやこだわりを考えながら購入しています。早く新しいものが欲しくなる人には、どうやったら今あるものを大事に使っていただけるのか考えながら支援の工夫を考えています。仕事終わりや休みの日を使って買い物に行くことがありますが、言葉で伝えられない人が多いため、好みのものを買いたいときは私が、「どちらが好きですか？」など聞き、頷く様子から、好みを判断しています。

現在、私はさをり織りの活動の支援もさせていただいています。糸通しなどの活動があるのですが、利用者によっては、作業に気持ちが乗らない日もあり、取り組み状況はそれぞれです。そのような場合は、「頑張れ」と声をかけるのではなく、「頑張っていますね」という声かけをしています。少しでも気持ちが乗るような声かけを心掛けています。

コミュニケーションの方法も一人ひとり違います。言葉を発することが難しい利用者が多いので、様々なコミュニケーションの方法をとっています。手話、ガッツポーズ、握手、ピースサイン、ハグなどです。「私に伝えたい思いはこうかな」と汲み取り、確認しながら関わらせてもらっています。

毎日関わると、支援員と利用者という関係ではなく、家族に似た関係だと感じることがあります。コミュニケーションをとるときも、私を娘や母と思って関わってくださる利用者には、そのように応えたいと思い対応しています。お互いの存在が、頼りになり、頼りにされる存在で、家族のようで家族でない不思議な関係だと感じることがあります。そのようなお互いの関係が、とまどいや悩みを抱えることもありますが、私にとっては安心できる場所になっています。

利用者との関わりや支援の方法について、仕事が終わってからふりかえることがあります。何がその人にとってよいのか、モヤモヤした気持ちになることがあります。そのような時は、「結果を求めるのではなく、関わる過程が大事である」いう大学の授業を思い出し、気持ちを整理しています。

日常生活に介護や介助が必要な人には、自立支援を目指して支援をしています。その際、私が大切にしているのは、「あせらず　あわてず　あきらめず」という大和学園のスローガンです。このスローガンのような待つ支援を私は心掛けています。待つという支援は、支援者にとって葛藤があります。トイレに入っても紙を何十回も折って時間が何分も経つときは、支援者が介助をすればすぐに済むのですが、私はそれをあまりしたくありません。業務に追われている現状はあっても、一人ひとりのこだわりを少しずつ受け止めて待つ、という支援を目指しています。

この待つ姿勢は、業務の忙しさの中では葛藤となります。私の待つ支援方法に、甘いと感じる支援者もいると思います。しかし利用者主体の支援には待つことも必要だと感じています。私の支援や行動は利用者のためになっているのか、常に不安があり、周りの支援者の支援方法と比べ悩むこともあります。悩んだときにもまた、この「あせらず、あわてず、あきらめず」というスローガンを思い出し、自分を鼓舞しています。これからも私なりの支援方法を深め、よりよい支援を目指していきたいと思っています。初めは業務に追われていましたが、今は自然体で働けていると思います。利用者との関わりを楽しむということを大切にしています。先日、排泄介助の際、初めてトイレで排泄ができた利用者がいました。その時は、私も本当に嬉しくて、一緒に泣いて喜びました。利用者と楽しく過ごすだけでなく、支援者には冷静な判断が必要な時が多くあります。自傷他害行為の場面に遭遇することもあるため、支援者として優先順位を考えながら行動する力も必要です。

私は、大学で、社会福祉士と保育士の資格を取得しました。現在、勤務しているのは障害者支援施設ですが、どちらの資格の学びも活かされています。音楽や制作活動の時には、保育士養成で学んだ知識が活かされています。施設では、福祉系大学の卒業生という目で見られています。学んだことが発揮できるよう、私なりに頑張っています。何事も一生懸命という言葉を大事にして、毎日働いています。

14 期生　木曽　朱美さん
児童福祉分野（社会福祉法人ゼノ少年牧場
松永東保育園勤務　職種：保育士）

【自己紹介、仕事の紹介】

社会福祉法人ゼノ少年牧場は、障害者支援施設、認定こども園、保育園を持っている法人です。私の勤務している保育園は、3 年前から公立から私立

に変わりました。1階に保育園、2階に放課後等デイサービスがあり、保育園の先生は、年齢も幅広く、ベテランの先生もいらっしゃるので頼りにしています。私の法人は働き方改革を推進しており、15分前出勤、15分以内退勤という考え方で、働きやすい環境です。しかし、残業が必要な日もあるため、その時は届け出を出して残業をしています。法人内で月に1回から2回新人研修があります。本部で、法人の歴史、事業所見学、障害・発達の理解について研修を受けています。

松永東保育園には、約150名の子どもがいます。私は1歳児24名の担任で、ベテランの先生、パートの先生2名と私の計4名で子どもを担任しています。4月は私にとって初めての職場で緊張していましたが、子どもにとってもクラス変えや、初めての環境で不安が多い時期です。初めは同時に起こるハプニングに自分がついて行けず、どこの子どもから見たらよいのか焦っていました。私が焦ると、子どもが安心して過ごすことができていないと気づき、私自身が余裕を持つことが一番大切だとわかりました。周りをよく見ながら動き、子どもに丁寧に関わることを心掛けました。

子どもは、私のことを「き一先生」「きそ先生」と呼び、私の手遊びや絵本の読み聞かせの真似をしている子どももいます。その姿が愛おしく、もっと頑張ろうという気持ちになります。クッキングや制作など、私が活動を考えることもありますが、子どもが楽しそうに遊んでいると、達成感を感じ、もっと頑張ろうと、意欲が湧きます。

クラスの子どもは、今、トイレトレーニングの時期です。便器内の水で遊んだり、便器をじっと見ていたり、子どものトイレへの興味・関心の姿を見ると、1歳児ならではの発想や感じ方でとても興味深いです。

私がこの園を選んだのは、大学の先生からの勧めでした。インターンシップを募集していたため、すぐ申し込みをし、3日間体験実習をさせていただきました。その体験から、この園で働きたいと強く思うようになりました。

大学時代はダンス部に所属していました。アルバイトもしていて、忙しい日々でしたが、充実していました。保育園で、親子ダンスの活動があるのですが、その際には、ダンス部の経験が活かされています。大学では、保育士だけでなく社会福祉士の資格も取得しました。保育園の業務でも、社会福祉士の学びは活かされています。家庭訪問、個人懇談会では、話の聞き方、場の雰囲気作り等大学での学びを思い出しながら実践しています。

現在、実家暮らしで、生活のすべてを家族に頼っており、支えてもらっています。実家も保育園なので、仕事が休みの日は、実家の保育園の子どもと過ごすこともあり、毎日子どもがいる生活を送っています。保育士にしかわからない悩みは、保育士でもある家族に相談しています。私は5年で園長になるという目標を持って卒業したのですが、無謀であったと痛感しています。今は、子ども、保護者から頼られる保育士、園長を目指し、日々頑張っています。

13期生　村上　理奈さん

高齢者福祉分野（公立みつぎ総合病院　介護老人保健施設　みつぎの苑　　職種：介護福祉士）

【自己紹介、仕事の紹介】

私は介護老人保健施設　みつぎの苑で働いています。入所定員は150名で、その内一般棟70名、認知症専門棟30名、ユニット棟50名、デイケア40名です。公立の施設のため、産休、病休などもしっかり確保されています。特徴は、地域包括ケアシステムを推進しており、保健福祉総合施設と公立みつぎ総合病院が近くにあるところです。

私は一般棟で働いています。入所者のほとんどが全介助の状態です。排泄、入浴、食事などあらゆる場面で介助をしています。ショートステイ利用も多く、部屋の準備や荷物の整理なども行っています。医療的ケアの研修も受け、必要な方には実施しています。3名の利用者のケース担当もしており、3カ月ごとにカンファレンスを行っています。

看取りも多く、1年で20人看取りました。日々状態が変わることを実感し、人の死との向き合い

方について考えるようになりました。亡くなった後のケアもしてきたのですが、人の死に立ち合うことが悲しく辛く、仕事がしんどいと感じるようになりました。その一方で、利用者とのコミュニケーションは楽しく、介助をする場面でも特に悩むことはなく、1年目は楽しい業務と辛い業務の狭間で葛藤をする日々でした。2年目になり少し余裕ができた頃に、卒業論文を見返す機会がありました。私は「地域包括ケアシステムでの介護の在り方」について研究しました。施設は、食事、入浴、排泄などの介助だけをするのではなく、その人の生活スタイルに合わせた環境作りも大切です。改めて読み返したことで、「こんな介護がしたい」と思い、まずは利用者の生活に注目しました。100歳でも箸で食事をされる、朝の 5 時から般若心経を唱える、排泄はオムツの中でなく自立したい、食事の前に何分も手を合わるなど、一人ひとり様々な生活スタイルがあることを再発見できました。そうすると、それぞれの生活スタイルやこだわりを探すことが楽しくなってきました。業務が忙しいと、その場面を見逃しがちですが、私はしっかり観察し、利用者の行動を待つことを意識しようと思いました。待つことを大切にすると、利用者から「ここにいても、あなたなら家での生活ができるわ。」と言っていただき嬉しく思い、やりがいに繋がりました。帰宅願望が強い利用者に寄り添ったときも、勤務終了後、その方が私にお礼を言いたいと他の職員に伝えていたと聞き、とても嬉しく、このことが今でも仕事が頑張れているモチベーションになっています。

施設では月に3～4回研修があります。院内研修、新人研修、外部研修などあり、スキルアップ、キャリアアップにつながっています。

就職活動については、地元での就職を希望していました。先生に勧められ、施設見学に行き、受験することを決めました。現在、職場に近い所で一人暮らしをしています。実家で生活をすれば楽なこともありますが、一人暮らしの自由な生活が自分には合っているので、この生活に満足しています。

国家試験については、勉強方法は人それぞれだと思います。初めはグループ学習をしていたのですが、みんなが解けて私が解けない問題や、解釈が違うことで焦ってしまい、後半は自宅で勉強を一人でしていました。社会福祉士の学内模試を受けても、合格点には届いていませんでしたが、国家試験本番では、合格することができました。諦めないことが肝心だと思います。

13期生　森澤　美穂さん
医療福祉分野（西広島リハビリテーション病院
職種：医療ソーシャルワーカー）

【自己紹介、仕事の紹介】

私は現在、西広島リハビリテーション病院で相談員として働いています。当院は、52床の回復期リハビリテーション病棟を持っていて、私は、25名から30名の患者を担当しています。回復期リハビリテーション病棟は、疾病によって入院期間が決まっているため、入院初日から、退院日が決まっています。患者の多くは、急性期病院から手術後に転院して来られるため、患者や家族は今後の不安や戸惑いを抱えておられます。

仕事内容は、患者・家族から入院・退院に関する心配や悩みを聞き、対応することです。具体的には、自宅に帰ることが難しい患者に対しては自宅以外の生活の場を一緒に考える等です。入院された患者には、相談員ですと自己紹介をするのですが、一事務員として見られて、雑用を頼まれることが多く、困りごとを相談する相手として受け入れていただけていないことが今葛藤していることです。

病院では、相談員よりリハビリスタッフの方が患者と関わる時間が多いように感じます。そのため、患者の悩みや状態を相談より他職種が把握していることもあります。他職種が患者の相談内容を聞き、相談員の存在を患者に伝え、そこから相談員の役割を知ってもらうこともあります。その様子から、相談員という職種で働いているが、私の存在は何なのか…私に直接相談してくれればよ

いのに…もっと患者と寄り添える方法はないのか…という思いが溢れてくることがあります。2年目で経験年数は少ないですが、今の自分に何ができるのか、どうしたら安心して相談したいと思える相談員になれるのかという思いを持ちながら日々勤務しています。これから経験と実績を積み、患者にもスタッフからも、この人に相談したいと少しでも思ってもらえ、自分がいたら安心できるという存在になりたいと思っています。

大学入学時は、支援員のように利用者に直接関わる仕事に就きたいと思っていました。しかし、社会福祉士・精神保健福祉士の国家試験に合格すると、その資格を活かして、医療ソーシャルワーカーとして働きたいと思うようになり、現在の仕事を選びました。利用者に直接関わる時間はそんなに多くはありませんが、患者と少しでも多く関わりが持てるよう日々頑張っています。

私が現在、職場で受けた相談内容は、プリペイドカードの購入方法、消耗品の補充、入院費が高額で支払いに困っている、家族との関係が良くないなど、様々あります。どんな相談でも、丁寧に対応し、一つずつ患者や家族と一緒に解決をし、経験を積んで頼りになる相談員を目指していきたいです。

第二部　卒業生・在校生によるシンポジウム

―仕事の葛藤、難しさについて―

※森澤さんからは、先ほど具体的に話を聞けたので、3人に答えていただきました。

村上さん

看取りの支援について難しさ、悩みを感じます。1 年間に何人も看取る状況は普段の生活で経験することはありません。介護福祉士は人生の最期にも関わる仕事で、覚悟はしていましたが、辛いと思うことも多くありました。その辛いと思うのは、「もっとこうしていれば…」という後悔の思いからそのような感情になりました。ですが、このような経験をしたからこそ、今は前向きに働けていると思います。

木曽さん

子どもの行動に対して、どこまで見守ってどこから手助けするのかということが難しいです。子どものやる気は先生によって変わります。子どもの甘えを受け入れるかどうか、またどのような声かけをし、やる気を促すかなど考え悩みます。

時乗さん

コミュニケーション方法について難しさを感じます。私の言っていることは伝わっているのか、相手の言っていることを私が理解できているのかということです。感情と言葉の表現方法が一致していない人もいます。怒っているように話していても嬉しい感情を持っておられる人もいます。そのような思いを読み取る難しさを感じていますが、私は利用者との関係を作りながら、コミュニケーションのとり方を考えていきたいです。

質問：4年生　中村さん

時乗さんに質問です。利用者主体で仕事に臨まれていますが、他の職員から甘いよと言われる現状もあると話されていました。それでも自分のスタンスを貫ける思いを教えていただきたいです。

時乗さん

例えば、何か利用者が選択する場面では、ある職員は「〇〇さんはこっちが好きよね？こっちがいいよね？」と言います。ですが私はどちらが好きか、利用者に選んでもらいたいと思っています。私だったら、こうされたいなと自分に置き換えて考えることが多いです。それに加え福祉の専門職としてあるべき姿を目指していきたいと考えています。

質問4年生深浦さん

対人援助の仕事は、うまくいかないこともあると思います。うまくいかなかった時に、気持ちを

どのように切り替えているのか教えてほしいです。

時乗さん

私は、気持ちを切り替えることが苦手で、引きずるタイプです。これで良かったのかなと自宅で考えてしまうこともあります。なるべく引きずらないように、職場の赤いエプロンを外したら気持ちのスイッチをオフに切り替えるよう意識しています。職場と自宅が同じ地域のため、プライベートでも利用者に会うこともあるので、職場でプライベートなことはあまり話さないようにしています。

木曽さん

職場が福山市で、自宅が尾道市です。職場と自宅が同じ地域は避けたいと感じていたので、この園を選んだということもあります。辛いと感じた時は大きな声を出して発散しています。

村上さん：

職場と自宅は地域が違うため、仕事と私生活の切り替えができています。

森澤さん

実家暮らしをしています。高速道路を使っても通勤に片道 1 時間かかります。職場の制服を脱いだら、仕事のことは考えないようにしていますが、片道 1 時間通勤をしているため、家でゆっくり過ごす時間が今はあまりとれていません。そのため、切り替えているというよりは時間に追われて生活しているような状況です。

―学会に参加してくれた卒業生から
　本日の感想をいただきました―

1 期生 曳野さん

1、2 年目の皆さんが、「自分に何ができるのだろうと考えている」というお話を聞いて、私の 1、2 年目はそのように考えていただろうかと振り返っていました。利用者からは、何年目であろうとプロとして見られています。今の自分にできることに全力かつ誠実に向き合い、できなかったこともすべて経験にしていきましょう。そして、これからもまた悩むと思いますが、それぞれの形で歩んでいきましょう。

―最後に　仕事をしていて良かったなと
　思うことや、やりがいについて―

森澤さん

退院された患者からアンケートが送られてきます。全員が送っていただけるわけではないのですが、退院後の生活についての状況などが書かれています。その中にお礼などが書いてあると、とても嬉しい気持ちになります。

村上さん

利用者の小さな変化に気づけたことです。会話でのコミュニケーションはできない方が、こちらの問いかけに頷いて反応を示してくれた時は本当に嬉しいです。その喜びから、何回も声をかけ続けてしまいます。そのような時「うるさい？」と聞くと、首を縦に振られます。こんな場面も嬉しくて、やりがいに繋がっていると思います。

木曽さん

自分の考えた保育を子どもが喜んで遊んでいる様子をみるとやってよかったなと感じます。活動を考えたり、手作りおもちゃで子どもが一生懸命遊んでいると、とても嬉しいです。

時乗さん

小さいことでも、喜び、楽しみ、悲しみ、怒りを共有できると今の仕事をやっていて良かったと感じます。毎日一緒に過ごしているといろいろなことが起こります。利用者にとって楽しいことも苦しいこともたくさんあり、その時々の利用者の感情に寄り添える嬉しさを感じています。

Ⅲ．総括

就職して1、2年目という卒業生に話をしていただきました。そのため、在校生にとっては、より就職後のイメージがふくらみ、中堅やベテランの卒業生にとっては、自分のこれまでをふりかえる有意義な時間になったと思います。理想と現実という壁にぶつかったり、より良い支援とは何かを考えたり、分野はそれぞれ違っても悩んでいることは同じでした。それぞれ専門職として成長しながら悩み葛藤しながら成長している様子が伺えました。仕事のやりがいや達成感を、なかなか見つけられない発表者に対し、同窓生の先輩が「今は誠実に全力で向き合うしかない。また悩むかもしれないし、うまくいかないこともあるかもしれないが、すべてそれも経験となる。」という言葉をかけてくれました。文教生のつながり、福祉専門職のつながりが学会を通して感じられました。

今回は、北星学園大学の中村和彦先生から総評をいただきました。中村先生は、本学科創設時より本学に勤務され、現在は北海道で福祉専門職の養成に携わっておられます。中村先生からは、15～20年のベテラン福祉専門職の方々の研修会でも、本日の発表者4名のような悩みを抱えているというお話をしていただきました。経験年数は違っても、その時々で悩み、葛藤しながら成長していくのが福祉の仕事です。これから社会人となる在校生、卒業して働いている卒業生に大きなエールを送っていただきました。

この学会を通して、在校生、卒業生ともに様々感じることがあったと思います。今後も本学会は、卒業生と在学生の「タテの繋がり」を活かした取り組みを続けていきたいと考えています。来年度も実りある学会になるよう、より多くの在学生、卒業生の参加を期待しています。